

歌唱指導法研究Ⅱ：拍の意識を利用した 指導目標の設定について

宮 下 茂

(長崎大学教育学部音楽教育(声楽))

Methods of Singing, the Guide Method Research Ⅱ :
About setting of the guideline for the song class

Shigeru MIYASHITA

はじめに

筆者は平成12年より教員養成学部所属し、音楽科教員を目指す学生に対し「声楽」「歌唱表現法Ⅰ・Ⅱ」等の授業の中で声楽実技を担当している。ここでの指導は、芸術学部における声楽指導と些か異なるものである。芸術学部では、所謂専門としての声楽実技を身に着けることを目標とし、学生の能力に合わせた楽曲を選択し、歌唱能力を伸ばす指導を行う。教員養成学部では、学生自身の歌唱能力を伸ばすことは当然であるが、同時に学生が学校等において歌唱指導を行えるよう、歌唱指導者としての能力を身に着けることも目標としている。また、受講する学生の所属が幼稚園教育、小学校教育、中学校教育等と多様であり、音楽教員として目指す校種も異なり、同一授業の中で学生の将来を見据えて指導することも大切に思われる。

学校では、義務教育の9年間の音楽授業と高校の芸術選択科目での音楽授業があるが、学習指導要領を眺めると指導の目標や内容に大きな違いが見られない。それは音楽に関する能力を発展させながら、児童や生徒の段階に応じた教育を行う、音楽教育の特徴であり、歌唱指導においても同様と言える。そのため、児童や生徒の段階に応じた歌唱指導が必要であり、音楽教師による児童や生徒の歌唱能力の段階の見極めが求められる。

本論文では、教員養成学部の授業の中で学生に実践している、歌唱の目標設定に関わる指導の一例をまとめることとする。それにより、筆者の考えを明らかとし、今後の歌唱指導法研究に発展させる所存である。

尚、授業の中では、楽曲に合わせた表現法を学ぶことよりも、歌唱能力の成長を学ぶことに主眼を置いている。例えるなら「枝葉を整える」ことよりも「しっかりとした幹を育ててゆく」方法を学んでいく。楽曲は、「帰れソレントへ」(美龍明子作詞、クルティス作曲)を教材とし、日本語歌唱により実践を行っている。

授業の内容

授業では歌唱を4つの段階に分け、便宜上、「小学生風歌唱」「中学生風歌唱」「高校生風歌唱」「大人の歌唱」と呼び、学生同士の比較聴取により段階的に歌唱内容が発展する

ことを理解できるよう工夫している。それにより、単純に児童や生徒の学年、歌唱の段階等に合わせた指導を行うのではなく、児童や生徒の歌唱の実態を見極め、段階を設定し、次の段階に向けて指導の目標を設定できることを目指している。

(1) 小学生風歌唱（明確な母音でのリズム感のある歌唱）

ここでの指導は、既に楽曲を歌唱できていることを前提として行う。

「帰れソレントへ」は四分の三拍子であるが、1拍目、2拍目、3拍目のすべての拍をはっきりと強調して歌唱する。（譜例1）

これにより、明るく明快な母音ですべての拍を歌唱でき、生き活きとした印象の歌唱となる。また、豊かで伸びやかなボリューム感のある歌唱となる。

ここで、小学生の頃の〈歌う楽しさ〉を思い出すよう心掛ける。

それとともに、次の段階である拍子感につながる、整然としたリズム感のある統一した歌唱となる。

この歌唱を理想的な小学生の歌唱、「小学生風歌唱」として示す。

（譜例1）小学生風歌唱

うるわしのソレント うなばらはるかに

(2) 中学生風歌唱（明確な母音での拍子感のある歌唱）

ここでの指導は、三拍子の1拍目を強調しながら歌唱する。（譜例2）

これにより、明るく明快な母音のまま、豊かで伸びやかなボリューム感のある歌唱を続けながら、四分の三拍子の拍子感の感じられる、整然としたリズム感のある音楽的な（器楽的な）歌唱となる。

ここでも、小学生風歌唱での〈歌う楽しさ〉を失わないよう心掛ける。

この歌唱を理想的な中学生の歌唱、「中学生風歌唱」として示す。

（譜例2）中学生風歌唱

うるわしのソレント うなばらはるかに

(3) 高校生風歌唱（明確な母音での言葉の抑揚を意識した歌唱）

ここでの指導は、歌詞の区切りを強調しながら歌唱する。（譜例3）

ここで、明るく明快な母音のまま、豊かで伸びやかなボリューム感のある歌唱を続け、四分の三拍子の拍子感を感じながら、整然としたリズム感を失わないよう心掛ける。

これにより、歌詞が明確に伝わりながら、音楽と言葉が融合した歌唱となる。

この歌唱を理想的な高校生の歌唱、「高校生風歌唱」として示す。

（譜例3）高校生風歌唱

うるわしのソレント うなばらはるかに

(4) 大人の歌唱（明確な母音での表現力を感じられる歌唱）

ここでの指導は、四分の三拍子の拍子感を感じながらも、言葉の意味を考え、それぞれの言葉に相応しい感情を歌声で表してゆく。

例えば、恋い焦がれるような憧れを表す「うるわしの」、単なる憧れだけでなくハッキリと自分の記憶にある存在感のある「ソレント」、ソレントの崖に荒々しく波打つような力強い「うなばら」、気が遠くなるような距離を感じさせるおぼろげな「はるかに」など、言葉の一つ一つにイメージを与え、それを音色として表すよう歌唱する。

明るく明快な母音を歌唱するが時には母音に明暗をつける、四分の三拍子の拍子感の中でテンポ感に緩急をつける等、可能な限り自由に、言葉から受け取った感情を表出するよう心掛ける。

これにより、歌詞の情感と音楽とが融合した、豊かな表現を感じさせる演奏となる。

この歌唱を明確な母音での表現力を感じられる、理想的な大人の歌唱、「大人の歌唱」として示す。

（譜例4）大人の歌唱

うるわしのソレント うなばらはるかに
 (憧れをもって) (存在感をもって) (力強く) (おぼろげに)

但し、それぞれの歌唱を別々に行うのではなく、「小学生風歌唱」の意識をもって「中学生風歌唱」を行い、「中学校風歌唱」の意識をもって「高校生風歌唱」を行い、「高校生風歌唱」の意識をもって「大人の歌唱」を行うなど、意識を積み重ねて歌唱してゆくことが重要である。

終わりに

教員養成学部の歌唱授業の中で、声楽を専門としない学生の演奏を聴いて感じられることのひとつに、音楽を好み、音楽科教員を目指しているはずでありながら、豊かな歌声で楽し気に歌唱しようとする学生が少ないことがある。

歌唱している学生の中に音楽を好まない者がいるとは思われず、多くの学生が小学生の頃には伸びやかで豊かな歌声で歌唱していたと考えられる。

その小学生が学校での音楽授業の進む中で、楽曲の内容を表現することを学び、楽曲の音域の広がりに合わせて裏声を駆使することを学び、音楽を好むが故に、小学生の頃の豊かな歌声で歌うことそのもの、楽しむ歌唱を忘れてしまっていると、筆者は考える。

歌唱の表現を工夫するために歌声を失ってゆくのは本末転倒である。

本来、歌唱の中で歌声作りは最も大切なことである。歌声が育つことによって、頭で考え心で感じる音楽表現を表出することが可能となる。

今回の拍の意識を利用した指導目標の設定の最大の目標は、児童や生徒の歌声を育て続け、豊かな歌声での表現を身に着けさせることにある。

平成29年度前期の授業では3年生5名が受講する授業等で実践したが、授業後のレポートの中で、「強拍の置き方によって曲の印象が変わる」「単語のイメージを持って表現、歌いわけることに集中しました。うるわしの（ほんやり）ソレント（しっかり）、海原（力強く）はるかに（すーっと遠くに）、このように一つの短いフレーズの中の単語を言葉としてどのようなイメージができるか考え、それを大きさに歌いわけるように工夫しました」等、全員が歌唱学習の目標への理解を示していた。

筆者は、今後も歌唱学習の試行を行い、教員養成学部で歌唱授業の指導内容への理解を図り、他の楽曲でも学習の指導を試みる所存である。